

# 看護が支える 地域共生社会



全員参加型社会の実現を目指して

## 第3回 有限会社 耕グループくわのみ (岐阜県)

「豊かな環境を整え、地域住民の役に立ちたい」。岐阜県恵那市岩村町にある有限会社耕グループくわのみは「地域ファースト」をモットーに事業展開してきた。その結果、現在までに訪問看護や看護小規模多機能型居宅介護（看多機）など、7つのサービスを提供するまでに規模を拡大している。

くわのみの各事業を統括するのは繁澤弘子さん。保健師と訪問看護師のキャリアの中で、環境（人・建物・自然）を整えることで、病や障害を抱えていても利用者の心はより豊かになることを学んだ。看護と福祉の力で、地域住民が安心して生活できるまちづくりを目指し、2004年に起業を決意した。誰もが気軽に立ち寄れる拠点を中心に活動したいという思いから、最初にグループホームの立ち上げに着手。「24時間いつでも誰かがいる。その誰かが看護や介護のプロだったらいいなと考えました」

開設にあたっての資金調達では地域住民の力を借りた。開設趣旨を説明して回り、賛同者を一人一人増やし、合計4,000万円の個人借入れをしてオープンにこぎつけた。オープン後もくわのみは、住民が支援者として頻繁に出入りする居場所となった。すると、困り事を繁澤さん

やスタッフに相談するような環境ができ、そのニーズに応える形でサービスを多角化した。

### 「地域とつなぐ」視点を持つ

地域の拠点としてさまざまな相談が寄せられるようになると、自然と医療ニーズが多様で困難な事例の紹介が増えた。そうした事例の一つ一つ丁寧に対応することで、「くわのみさんなら」と周囲からの信頼は増していった。

退院後に自宅へ戻っても、老老世帯や家族の介護力が不十分なことから、本人・家族だけでは生活の継続が困難なことも少なくない。そのため、訪問看護師は「地域とつなぐ」という視点を持ち、地域内の資源を活用して生活継続の可能性を見極める必要がある。

一方で、「利用者にばかり目を向けてはいけません」と注意を促すのは家族支援専門看護師で、くわのみスタッフの船渡弘子さん。介護者（子）から利用者（親）への虐待事例に対応する際、孤立しがちな介護者も支援対象として捉えて介入する必要があるという。中でも、介護職やケアマネジャーなどと密に関わることをポイントに挙げ、多職種の実践を専門看護師が持つ知識や技術でサポートするような関係性を保ち、地域全体の家族支援の質向上に努めている。

2015年には、医療ニーズの高い利用者の希望にさらに柔軟に対応するため、県内南東部（東濃地域）で初となる看多機の事業所を開所した。

### 福祉を自分事として捉える仕掛けが必要

繁澤さんは、くわのみを非常時に頼る場所ではなく、日常から地域の人々が入り出す場を目指すことを目指している。それには住民一人一



手作り石窯をバックに繁澤さん（前列左）とスタッフの皆さん

人に福祉を自分事として捉えてもらう必要があり、その仕掛けが必要だ。

例えば、くわのみの敷地内には石窯があり、地域のイベント時に焼き立てのピザやパンなどを提供し、くわのみを知ってもらうきっかけづくりとしている。石窯をつくったのは地域の住民で、イベント時には毎回ボランティアで駆けつけてくれる。また、実習などの受け入れも、対象は看護学生に限らない。まちづくりに関心のある他学部の学生をインターンとして受け入れ、看多機の利用者との交流を通じたまちおこしにも取り組んでいる。「こうした活動を通じて、くわのみや福祉をもっと身近な存在と捉えてほしい」と繁澤さんはその狙いを話す。

数年前から、障害者や引きこもりの人たちが集い、働く場をつくることを目的とした「畑プロジェクト」をスタート。将来的には就労支援事業につなげたい考えだ。地域ファーストで取り組む繁澤さん。高齢者や障害者でも安心して生活できるまちを目指し、今日も住民と共に考え、つくり上げる。